プロティノスのエネアデス
「プロティノスの悪とはなにか、そしてどこから生じるのか」I-8-(51)

訳注における著者名のない引用はプラトンの著書である

適宜、自分なりの注を加えてあるので、オレンジ色で示すことにする

1
悪がどこからきているのかを探ますならば、その問題のための存在に遡っていたはずである。或る種の存在だけに遡っていたはず、そういうことは別として、まず悪はいったい何であるのか、つまり悪の本性は何であるかをはじめの研究課題とする。適切に探求の発端を切ることになるだろう

というのも、そのようにすれば、「悪はどこから来て、どこに位置を占め、何に付属しているのか」ということもよく知られるだろう。一般的に言って、悪は存在するのかどうかということについても、悪見の一致をみることができるように思われるからである

しかし、ものはそれぞれの類似性によってのみ存在に遡っていたはずである（プラトン『ティマイオス』40d-41b）。悪の本性を知るのは、いったいわれわれのなかどなたであるのだろうか、これはむずかしい問題だろう

つまり知性や魂は形相であるから、形相を認知したり形相に対する欲求をもったりしたりするのであが、どうして悪が形相であるなどと想像しえるだろうか、それは善をまったく欠いているところにあらわれるのに

だが、同一の知識でもって相反するものを知ることができるのだし、善と悪は相反するものであるから、善を知る知識がまた悪を知ることになるだろう（プラトン『ピレボス』24a22）。もしそうだとすると、悪を知ろうとする人びとは、善についてもよく知っておかねばならないことになる

なぜなら、より善いものがより悪いものよりも先にあって形相であるが、より悪いものは形相ではなく、もしろ欠如だからである

2
それで、今のところは、現在の論旨に適した範囲内で、悪とはいったいどこから生じるのかを話していくことにしよう

けれども、どうして善と悪が反対なものであるのかということが、やはりはっきりしないだろう。おそらく、一方は始原であるが他方は終局であるとか、一方は形相であるが他方は欠如であるという事柄のようだが、しかし、この問題は後で検討することにしよう

善とは、万物がそれに依存するもの、全存在がそれを始原としても、それを必要としているので、欲し求めるものである（プラトン『形而上学』X87,1072b14）が、何も必要としないもの、それ自身で十分事足りているもの、何も欠けたところのないもの、万物に適度と限度を与えるもの（『ピレボス』16c5）、知性、実在、魂、生命、知的活動の水源となっているものである

また、美しいものはすべて善にいたるまでの間にあるのである、というのも、善そのものは美を超えているものであり、諸々の最善なるものはるかかなたにあるものとして、知性界に最強しているものだからである

また、あの知性界にあるものは、ひとつひとつはどうか誠然とは言い切ってはいないが、いずれにせよ、ひとつひとつが全体をなし、いたるところに全体としてあるからである

そして、そのひとつひとつが誠然とは言い切ってはいないが、いずれにせよ、ひとつひとつが全体をなし、いたるところに全体としてあるからである

そして、知性は善の最初の活動であり、第一の実在である。もっとも、このばあい、善は自己自身のなかにとどまっているのであるが

しか善は静止していても、知性の方は、いわば言のまわりで生きているかのように、それを囲み、活動しているのである

3
そこで、もしこれらのものが存在や存在のなかにあるものであれば、悪は存在のなかにも存在のなかにあるもののなかにも、あり方においてことになるだろう、というのも、それらのものは善きものだからである

もまたまもなくそれらの存在のなかにあるものとなるであろう、というのは、それらのものは善きものだからである

それゆえ、もしまことに悪があるとすれば、それは非存在のなかにあるであろう、というのは、非存在の形相のようなものであり、非存在と混じり合っている或るものに、もしくは非存在となんらかの仕方で共同しているものに関連があるという考え方が残されることになる

だが、このばあい、われわれは非存在ということを絶対的な意味で言っているのではなく、たんに存在とは異なるものという意味で用いているのであり（『ピレボス』257b3）

しかし、そうは言っても、存在にかかわる勢や勝が存在ではないと言われるような意味で非存在と言っているのであり、そして、この意味での非存在とは、

感性界の全体と感性界にかかわるすべての経験のことか、

それとも感性的なものよりも後のもので、そのなかに附帯しているもののことか、

あるいは感性的なものの始原となっているもののことか、

あるいは感性的なものの始原となっているもののことか、

もしくは感性界をそのようなものであるように仕上げているものの2つのことか、いずれかである

それゆえ、もしまことに悪があるとすれば、それは非存在のなかにあるであろう、というのは、非存在の形相のようなものであり、非存在と混じり合っている或るものに、もしくは非存在となんらかの仕方で共同しているものに関連があるという考え方が残されることになる

それゆえのも、人は今や思いついて、次のような考え方に到達することができるからである

それとこれらの特性は悪に附帯しているのではなく、むしろいわばその本質をなすものであり、悪が悪のどの部分を納めようと、そこに在の特性のすべてがあてはまるのである

そして、これらの特性は悪に附帯しているのではなく、むしろいわばその本質をなすものであり、それらの特性とその原理とは別物ではなく、それらの特性がまさわちその原理そのものであり、それらの特性がまさわちその原理そのものであるのだろうか

では、どんなヒュポスタシス（原理）がそれらの特性をそなえていれば、それらの特性とその原理とは別物ではなく、それらの特性がまさわちその原理そのものであり、それらの特性がまさわちその原理そのものであるのだろうか

すなわち、悪は適度との関係においては、形のなさであり、自足性との関係においては、たえざる不足であって、永久に無規定のものであり、決して静止せず、完全に受動的であり、満たされることのないものであり、とるに足りないものであり、本質的に悪いものであるのである

これに対して、この悪に関与し、これに似たものとなっているものは、悪いものにはなっていないのである

このようなことを問題にするのは、たとえ悪が他のものに附帯的に生じるとしても、その悪は、それ以前に、それ自体でなんらかのものであり、——たとえそれらがなんらかのものであるとしても——なければならないからである

つまり善に、善をそのものと附帯的な善があるように、悪にも、悪そのものとその悪があるように、それにしたがって他のものに附帯している悪がなければならないからである

それでは、適度のなさが適度のないものとなったのであろうか

しかし、適度がない適度のないものとなったのであろうか

つまり、もし適度のなさが他のもののなかにあるとすれば、それは<適度のないものの>のなかにあるのであり、そのばあいでは、適度のなさをもつことはできないのである

だが、<適度を与えられているものは適度を与えられていないもののなかにあるのだが——

だから、<スケーマ（姿）・エイドス（形）・モルペー（格好）>が尺度や限度の源にあって、自分の本性とは縁のないもので弱められているが、自分では少しも善いものをもっていないものの、真実在に<少べれば>劣っているものがなければならないことになるのであって、

実にこれこそ悪の実体であり——もし悪にも、なんらかの実体があり、ものとしてあるのであるが——われわれの議論はこれを見つけだして、第一義的・即時的な悪であるとするのである

4
だが物体の類は、素材を分有するものであるかぎり、第一義的な意ではないけれども、悪しきものであるのだろう。

だが、これに対して、魂の方はそれ自体では悪しきものではなく、それも、まったく悪しきものではないのである

だから、物体がもっているのは真実の形相ではなく、形相のようなものにすぎないであろう。まず、物体は生命を欠き、自分たちの不規則な動きによってただ外に誘惑しあい、魂に固有な活動を妨げ、たえず流動することによって真実在から遠ざけているからである

それでは、悪悪（と言われるもの）な魂とは、どんな魂なのだろうか

たとえばプラトンは、「もしもと魂のなかの悪徳の温床となっている部分を脱ぎ捨て（プライドン256b2）」と言っているが、そのことはのなかには、

悪と悪しきものは区別されるる必要がある

というのも、物体がもっているのは真実の形相ではなく、形相のようなものにすぎないであろう。

それでは、悪悪（と言われるもの）な魂とは、どんな魂なのだろうか

たとえばプラトンは、「もしもと魂のなかの悪徳の温床となっている部分を脱ぎ捨て（プライドン256b2）」と言っているが、そのことはのなかには、

という意味が含まれているのであるが、そのような意味では、悪悪な魂なのである

だが、その悪徳を作りだすものは、何だろうか、して、あなたはどのようにして、その悪徳を作りだすのだろうか

そして真似のもの本性が、その生成の源となっているのであって、その本性は、たとえ真似のなかにあるのであっても、たとえ真似のなかにあるのであって、ただ真似を見ただけにすぎないのであっても、自分のもっている（悪しきもの）悪で汚してしまうほどの（悪しきもの）悪なのである

「魂の非理的なエイドス（部分）は、適度のなさや超過や不足などの悪を受け取るものであって、それらの悪から、さらに放縦、臆病、その他の魂の悪徳や、魂の望まない諸々の情念が生じ、それらの情念が魂のなかに偽りの悪いなにを植えつけることによって、魂は善の判断を誤り、悪を追い求め善を避けるようになる」

まず第一に、劣悪な魂は素材の外にあるのでもなければ、ただ自分だけで存在しているのでもない、それゆえ、その魂は適度のなさに陥っているのである

というのも、その魂は素材をもっている物体と混じり合って しまっているからである。次に、その魂の悪徳を分有する部分が養われると、その部分は妨げられて観察することができなくなるのである

τὸ λογιζόμενον：ト・ロギゾメノン

生成の方、とは何か？

つまり、その魂はいろいろな情念をもったり、素材で暗くされたり、汚されたりするのである

つまり、素材の本性はまったく無にあるのであって、善の原理の方に、完全な不足のなかにあるのであって、ただ、完全な不足のなかにあるのであって、ただ、完全な不足のなかにあるのであって、ただ